

W. A. P. Martin, *A cycle of Cathay, or, China, south and north: with personal reminiscences*, Fleming H. Revell, 1896 Chapter VI・VII THE TUNGWEN COLLEGE

川尻文彦(解題・翻訳)

解題

ここに訳出したのは、W. A. P. Martin, *A cycle of Cathay, or, China, south and north: with personal reminiscences*, Fleming H. Revell, 1896の第六章と第七章のTHE TUNGWEN COLLEGEである。著者W. A. P. Martinはリアム・マーチン(一八二七〜一九一六)は米国北長老会の宣教師。米国出身で、中国名は丁隴良として知られる。タイトルにあるcycleは中国でいう花甲、日本でいう還暦で人の人生の一巡、つまり六十年を表す。Cathayは中国の別名である。直訳すれば、「中国(その北と南)の六十年——個人的な回想」になろう。THE TUNGWEN COLLEGEとはマーチンが総教習をつとめた同文館のことで、二章にわたって同文館でマーチンが経験した出来事を語っている。日本語で読めるマーチンの伝記としては、少し古いが、ジョン・サン・スペンス著、三石善吉訳『中国を変えた西洋人顧問』講談社、一九七五年 Jonathan Spence, 『To change China: Western advisers in China, 1620-1960』Little, Brown, 1969がある。その第五章「マーチンとフライヤー」でマーチンに言及しているが、史料的には *A cycle of Cathay, or, China, south and north: with personal reminiscences* に大きく依拠している。マーチンの中国での訳業については、吉田寅『中国プロテスタント伝教史研究』汲古書院、一九九七年の「第四章 マルティン

の中国語著作」で詳しく紹介されている。

マーチンは一八五〇年に宣教師として中国に渡り、その後、六〇年近く中国で生活することになる。マーチンは一八五八年に米国の翻訳官として米中間の天津条約の交渉に加わり、一八六三年に北京に居を定めた。それより前一八六二年に上海で布教活動をしていた時に、当時国際法の標準的教科書とされていたホイートンHenry Wheatonの『万国公法』(*Elements of International Law*, 1836)の翻訳に着手した。一八六三年に天津で崇厚に会い、訳稿の一部を見せたところ、崇厚が総理衙門の恭親王奕訢に紹介した。この時文祥もこの本が清朝にとって有用なものであると知った。恭親王奕訢は人を遣わして訳稿に潤色を加え、五百万両を使って刊行した。出版後、清政府や各省の外交関係の役人が読み、国際法に対する認識を新たにすることになった。日本ではすぐさま翻刻され、多くの読者を獲得した。

一八六五年、マーチンは総稅務司ロバート・ハート(一八三五〜一九一一)の推薦により清朝政府に雇われ、フライヤーに代わって同文館の英文教習となり、その後、国際法教習を兼ねた。一八六九年には同文館の総教習となり、後に京師大学堂の総教習にもなった。恭親王奕訢や李鴻章など清朝の官僚と知り合うことになった。A cycle of *Ca-thay, or, China, south and north: with personal reminiscences*の中には中国社会の各層の状況やマーチンの考えや、清朝の官僚達との交流の様子が描かれている。一八九四年に健康問題で同文館を離れるまで、同文館に三十年間勤務し、教育活動に従事した。同文館の在職期間、マーチンは同文館の学生達と『格物入門』『富国策』などを翻訳した。国際公法、経済法、化学、格物学、自然地理、歴史、フランスや、イギリスの法典、解剖学、生理学、薬物学、外交領事指南書などを翻訳し、同文館の印刷所から刊行した。清末時期に西洋人宣教師によっていわゆる「漢訳洋書」が数多く出版され、海を渡って日本にもたらされたことが知られる。幕末から明治の初期にかけては西洋事情を知るルートは限られており、蘭字書や清国からもたらされる書籍がその重要な役割を担っていた。本翻訳はそのような「漢訳洋書」の編集過程を知る一つの手がかりになるだろう。

*A cycle of Cathay, or, China, south and north: with personal reminiscences* はマーチンの回想形式の自伝であり、一八五〇年に来華してから一八九五年に同文館を離れるまでを記している。一八九六年に英文の初版が、ニューヨーク、エジンバラ、ロンドンで出版され、その後、重版もされたから、それなりに読まれた本ということになる。中国では西洋人宣教師は、その文化的活動に焦点をあてられることは少なく、マーチンに対しても一九九〇年代からようやく学術的研究が始まった。*A cycle of Cathay, or, China, south and north: with personal reminiscences* も[美]丁隴良著、沈弘・憚文捷・郝田虎訳『花甲記憶——一位美国传教士眼中的晚清帝国』（広西師範大学出版社、二〇〇四年）と題して中国語訳（一九〇〇年の英文第三版が底本）が刊行されている。本翻訳に当たって参照した。

## 翻訳 第六章 同文館

国家の建設はありふれた出来事だが、それはコンゴ川流域のことでなければの話だ。もし、学校が中国の首都になれば、学校の歴史は面白みを欠いたものになっただろう。学校組織の詳細の代わりに、私は次々と脳裏に浮かぶ、若い学生、年老いた学生、教師達、役人達の中国人の生活に焦点をあてて見ていこうと思う。

一八六九年九月、休暇の後北京に到着すると、私は学校の状況を聞きに、ハート (Robert Hart) 氏のもとを訪れた。彼は言った。「それはまだ、何とか存続しているよ」。そして、彼は私をその総教習にと考えていること、また学校を運営するために毎年の関税歳入を全額私に手渡すとも付け加えた。私は答えた。「ランプの手入れをすることはかまいません。しかし、あなたが油を足し続けてくれるという状況でなければ、承諾しかねます」。その意味するところは、私は総教習の地位については受諾したが、経済面での責務はその限りではなかったからだ。私の主張のうち経済面に関して、彼は責任を担うことに同意し、その日から二十五年間、彼は高潔な誠実さをもって、その合意における彼の責務を果たした。私がいかにして自らの義務を果たしたかは、後々明らかになるだろう。学校にとって、ま

さしくハート氏はその父であり、私は養育するだけの乳母<sup>①</sup>だったが、今回の戦争で中国人がより良い面を見せたならば、それを自認しよう。ハート氏の推薦によって、私は総教習に就任したが、中国の大臣達が公函で主張したように、彼はただ大臣達がすでに作り上げていた結果を形にただけだった。この公函が送られる前に、中国側は私の数学的な知識をはかるために非公式の試験に掛け、問題用紙を与えた。誰が問題を用意したのか、誰が答案を採点したのか、私は知らなかった。しかし、私の答案は科学学校を主宰するのに最適だとする根拠として十分だと受け止められた。

一八六九年十一月二十六日、私は総理衙門の数人とアメリカ代理公使ウィリアムズ (Samuel W. Williams) を前に、総教習に着任した。ハート氏は欠席したが、彼からは雲が晴れていくようだとする、心からのお祝いの手紙をもたらした。約四十名の学生は教室で、学生監であり欧州委員である斌椿から紹介され、忠誠の拱手礼をとってくれたが、彼らの長い袍と房のついた儀礼用の帽子はとも好ましい眺めだった。私の就任の講話は中国語で行われ、説明の一部は、詩人として若干知られていた大学士・宝鋆の好評を受け、彼はそれを詩にし、二巻組の巻物にして、式典の思い出にとプレゼントしてくれた。

ハート氏と私は寧波で知り合った。彼は私の頓挫しかけていたミッシェンスクールを作るという試みを見通し、それについてこう言った。「もし誰かがそれを成し遂げられたのなら、君もできるだろう」。この冒険的な試みに、彼はおそらく疑念と、同時にそれに付随する信頼を抱いていた。彼の信頼の根拠は、私がいつも中国の高官達から気に入られていたということだった。大臣のうち三名には北京に来る前に知遇を得た。恭親王も含む、残り的大臣達には、頻繁な面会の機会を通じて親しくなった。恭親王は非常に慈悲深く、恭親王の私への接し方は、親密な友人同士であっても敬意をもって距離を保ち互いに拱手する、中国の冷淡な挨拶とは真逆の、満州人の心のこもった挨拶の後には、常に手に手を取り合った。外国人の間で中国の学問に通じていることは今よりも珍しかったこともあり、恭親王は私が中国の文人達と付き合っていることに感銘を受け、恭親王は私に『冠西』の雅号を与えた。この大げさな雅号

によつて、私は以降中国の人々に受け入れられやすくなった。

同文館の最も重要な目的は公務に携わる若者、特に国際交渉の場で活躍する人物を育てることだった。もし同文館の初期の歴史を要約するならば、その設立についての最初の提案はイギリスとの条約からもたらされたが、その条約にはイギリスの公文書は三年間中国語に翻訳されるものとし、また中国政府には有能な通訳を提供することが求められていた。この責務に対し、一八六二年英語のクラスが、翌年フランス語とロシア語のクラスが開かれた。中国で多くのことが有名無実である例として、ロシア語のクラスが新しいものではなかったことがあげられるだろう。その学校の存在は十八世紀中頃には記録されており、乾隆帝の時代にはロシアとの交渉の必要性から、学校は創設された。

長年、そこには中国人の教師がいたが、学生はいなかった。同文館へ統合された時に、過去と同文館をつなぐものは、ロシア語を知らない老教師一人だけだった。彼は学生を持たず本も持っておらず、ロシア語を母語とする教師にその場を取つて代わられた。その古い学校が残したものは、公有物としての名前だけで、それも正確に言えば虚名だった。しかし、革新に対しての反発が何より苛烈なこの国で、虚名であっても存在するということはまったく価値がないというわけでもなかった。

一八六一年十月に皇帝に奏上された、恭親王と総理衙門の文章から抜粋された次の一節は、その当時の同文館の歴史に光をあてており、そこからは外国人の助けなしに、彼らが同文館を創設しようと尽力したかが読み取れる。

「咸豐十年（一八六〇年）に私達は玉座の前で新しい章程を披露する光栄に恵まれた。近年の戦争の結果によつてその必要があつたのである。そのなかでも、私達は外国の文字や仕組みの知識が外国との交渉において不可欠であることを述べた。私達はそのため皇上に広東や上海の総督や巡撫に外国の文章によく通じた中国人を見つけ、彼らを良い外国の本を携えて北京に行くよう指示してもらふよう依頼し、八旗から選抜した若者を教育するように求めた。

「広東の総督は推薦できる者はいないと報告した。江蘇の巡撫は一人だけが自薦してきたが、彼はけつしてその分野を深く熟知しているとはいえないと報告した。

「このことは私達の計画を実行に移すことにおいて長い遅延をもたらすことを意味している。皇上の臣下達はいくつかの国々の状況を知るためにはそれらの言語や文章を理解することが必要であると確信している。これは私達自身が狡猾な詐術の犠牲者にならないための唯一の方法である。

「いまではこれらの国は多額の費用を使って中国人を雇って私達の文学を彼らに教えている。しかし、中国には外国の言語や文章についての深い知識を持った者はいない。このような状態ではそれらの国についての十分な知識をえることはまったくできないであろう。

「広東や江蘇から中国人の候補者を北京に送ることができないため、私達はそれに適した人物を外国から招かざるをえなかった」。

英文館の最初の教習は、現在香港主教のバードン (John Burdon) 氏だった。彼の後任のフライヤー (John Fryer) 博士は科学書の翻訳者として名を成してから、上海の工廠「江南製造局」と繋がりを持っていた。彼の辞職後、バーリングゲーム (Anson Burlingame) 氏とウェイド (Thomas F. Wade) 氏は私をその職に推薦したが、彼らは総理衙門から助言を求められていた。学生は少なく俸給も少ないと、当初要請を受けた時、私は軽く考えていた。バーリングゲーム氏は言った。「実際学校の規模は大きくないが、君はそれを大きくすることができると言っている。この言葉は彼が同文館の発展性について、はつきりと認識していたことを示している。

これ以前に、彼は広東の暴動で損害を受けたアメリカ人の財産への補償金の余剰をもって、学校を設立するということを思いつき、私をその学長に据えようと考えた。彼の要請を受け、私は学校のため計画を練ったが、差引総計三〇四十ドルとなるその資金は二十年後中国に返還され、彼はそれを手に入れることができなかった。彼の計画は一時保留とされたが、彼は私が中国の教育の場で地位を得たことを喜んでいて。

儀式にふさわしい日が選ばれ、大臣の一人である恒祺が公使館に来て、バーリングゲーム氏の前で私に総理衙門からの任命状を手渡した。それは赤い紙で、俸給についての些細な言及は避けられていたが、「馬や駕籠、紙筆」の代金

として年間千両（千三百三十ドル）が支払われるとの説明があつた。その後、新しい契約では私の給料は「薪や水のためのお金」と呼ばれ、その実際の値段の五倍の額が支払われた。この名前は奇妙に聞こえるが、しかし英語の「サラリー」だつて「塩代」を意味することを我々は忘れていないはずだ。

就任を承諾するに際し、私は一日に二時間のみ新しい職務に時間を費やしたいと慎重に要求した。数か月の試行期間後、同文館の発展の見込みは見て取れなかつたので、私は辞職の許可を申し出た。私の辞意に応える代わりに、総理衙門は二名、戸部尚書の董恂と刑部尚書の潭延驥（前総督）を私のものに派遣し、辞職を撤回しよう説得を試みた。

彼らは尋ねた。「何故？ あなたは自らの地位を捨てたいのですか？ 俸給が十分ではないのでしょうか？」

私は言った。「いいえ。仕事に打ち込むような時間ありませんでした」

「敬意を欠いた誰かに、気分を害されたのでしょうか」

「そういつたことは全くありません。学生も職員も皆親切で、礼儀正しいです」

「では、何が問題なのでしょう。何故、あなたは辞職させてほしいと言うのでしょうか」

私は言った。「率直に言えば、英語のみを学ぶ十人余りの若者の世話をするというのは、私にとつてあまりにささやかすぎる仕事です。それは私の時間を無駄にするようなものです」

彼らは言った。「それがあなたの不満の原因であるならば、あなたは間違っています。あなたはいつても、たった十人の若者の世話をするだけではありません。そして、考えて下さい。彼ら若者の将来を。我々は老いていきますが、彼らのうち何人かは我々の地位に就くことが求められるでしょう。皇帝陛下もまた、外国語を学ぶことに関心がある様子です。誰が、あなたの学生達の中から陛下にご教授するよう招請がないといえるのでしょうか？」

その予言は、のちに非常に注目すべきものであつたことが分かつた。

人生で最も重要なことは、人を良いほうに感化させることだと考える人間を非常に満足させるこの見方は、私に留まることを決意させた。しかし、私はすでに後任を探してほしいと申し出ており、グッドリッチ (Chauncey

(Goodrich) 氏にそのことを依頼までしていた。だが、グッドリッチ氏は学校が福音を伝道する場から変化することを拒否した。私は自分が北京の教会の道端に学校を見つけた時以上に開かれた、より影響を与える場とすることを約束し、それを維持した。どちらが正しかったのか？ それはどちらでもなく、またどちらでもあるのだろう。

十人の門下生に英語を教えるほか、私は彼らに電信機の使い方と管理の方法を教えた。この素晴らしい発明品を導入する目的で、私はすでにフィラデルフィアで講習を受けていた。私は自費で機材を二セット持ってきていた。一つはモールズ式で、もう一つはアルファベット板式で、どちらも習得が容易で、目を引くものだった。このクラスを担当する前に、私は総理衙門の役人が私の家での実験を見られるよう、招待した。恭親王はホイートンの改訂に際し、四名の中国人に私を補佐するよう命じた。実験中、彼らは何ら知的興味を引かれたような様子を見せなかった。彼らの一人で翰林院の学士は軽蔑して、「中国は電信機などなくても、四千年間偉大な帝国でありつづけた」と述べた。いくつかのおもちゃを見せると、彼らは大喜びで、電磁の魚を掴もうとし、電磁のあひるを先導したり追いかけてたりして、多くの時間を過ごし、その間新しい娯楽に夢中だった。彼らは文学については立派な大人だったが、科学の分野ではまだ子供だった。

こうした役に立たない証人による報告で、より高位の大臣が偏見を持つのではという恐れから、私は調査のために総理衙門に電信機を貸すことを申し出た。彼らは私にそれを設置するための部屋を与え、指定された日に実験を見学するために集まった。万事成功し、老大臣も彼らの部下と同様子供のようになり、ただ魚やあひるで遊ぶだけでなく、電信機で遊び、ベル式信号を送り、自身を銅線で覆って回路を遮断し、火花が銅線から銅線へと走るのを見て、心から笑い、動作のために打鍵をセットした。実験終了後、いつものように朝食を頂いたが、私を除くとヨーロッパから戻ったばかりのハート氏が唯一の賓客だった。私が彼に実験の成功を話すと、彼はそっけなく言った。「まあ、ささやかな手助けにはなるだろうね」。私の考えでは、それはまったく「ささやかな」ものではなかった。そして、戸部尚書の董恂にとっても、そうだった。彼はしばしば電信機を見にやって来て、文章を送ることを学んだ。彼もま



た、私がアルファベットの頭文字を並べるのを助け、最終的には二つの文字を針が示すことで一つの文字が記される、簡単に言うるとbとaでDa『八』となることに気づいた。大学士の文祥は私の機械を通じて、一回の洋行で得るもの以上のことを理解した。

電信機は一年間そこに置かれたが、徐々に私はそれはただちに結果の出るものではないと確信するようになっていったため、自分の元へとまた戻した。それは今や同文館の博物館に古びたがらくたとして並べられている。

一八七四年一月デンマーク公使のラスロフ將軍 (Valdemar Rastoff) から私は太平華北洋行 [The Great Northern Company] に所属する彼の部下を、彼らの機器を総理衙門の大臣達に披露できるよう手配してくれないかと依頼された。私は展示を行うため、彼らを同文館のホールへと招待し、大臣達に列席を頼んだ。彼らの機器は精巧だったが、中国の大臣達はそれよりも、同文館の学生達が全て中国産のもので作った、とても簡素な電信機の方に感銘を受けた。それはよく出来ていた。そして、デンマーク公使もそれを見物し、モーセとアロンのような技術者達は、その魔術的な競争相手を、出エジプト記でモーセやアロンと競い合ったエジプトの魔術師ヤンネとヤンブレ<sup>(2)</sup>のように見なしに違いない。

数年後、私は北京山上で石だらけの高地を耕す、手のごつごつとした農夫と話をした時に、私もそれを感じた。

「どうして、あんた方外国人は帝国を作らないんだ？」彼は言った。

「君は我々がそうできると思うのかね？」私がそう聞き返すと、彼は「勿論」と山の下の平地を横切つて伸びる電信機の線を指さしながら、答えた。

「あれを作った人達は、帝国だつて手に入れられる人達ですよ。彼の頭は中国古典に浸りきつていなかった。そして、中国にはそういった人間が多かったが、不幸なことに彼らは士大夫の支配下にあつたのである。

しかし、それは想定されたことだった。そこにはまだ「学寮」も「大学」もなかった。あるのは、通訳者養成学校であつて、それ以上のものではなかった。この学校はその後発展した学校の原型だった。それは総理衙門に付属する

空いていた建物に設置された。名前は同文館とし、この名称は現在も使われているが、「総合芸術学校」を意味した。つまり、中国の政治家達が語学の他に、様々な学問を学ぶ必要性を実感する時が来たのである。

一八六五年通訳者養成学校に科学の学科が追加され、中国古来の学問で高い学力を有する学生達の入学を許可することによって、通訳者の学校からカレッジのランクが上がった。この事業の範囲と目的は恭親王と大臣達の二つの上奏文に示されている。

最初の奏上で彼らはこう述べた。

「同文館は今や設立から、ほぼ五年になった。学生達は西洋の言語と文章においてかなりの進歩をみせている。しかしながら、とても若く、彼ら自身の国の文章にそれほど習熟していないので、彼らの時間はやむなく中国語と外国語の勉強にさかれることになる。加えて、もし私達が彼らに天文学や数学を学ばせたとするならば、私達は彼らがすべてを中途半端にしか習得できずに終わってしまうことを危惧している。

「西洋の機械、汽船、火器や軍事設備はすべて数理科学にその源を有している。現在、上海やその他の場所で、汽船の建造が始まっている。しかし、もし私達が皮相な知識で満足し、その根源にまでたどり着こうとしないならば、そのような努力は堅実な成功を収めることはできないであろう。

「皇上の臣下は引き続き何度も議論を重ね、さらに一つの学校を増設し、二〇歳以上で、すでに科挙の試験に合格している者に入学を許可すべきであると提言した。なぜならもし私達が数学的計算の技法、物理学的な探究、天文学的な観察、エンジンの製作、水路の設計を理解することができれば、まさにこのことだけが帝国の力の確実な成長をもたらすことができる」と信じているからである」。

これらの提案が皇帝に奏上されると、ただちに彼らは旧弊な官僚達からの激しい攻撃に晒された。二回目の奏上はこれらの反対に対する返答だった。こうした先見の明と視野の広さは、どちらも本当に称賛に値する。しかし悲しむべきは、そうした知性溢れる人々が愛国的で偏狭な人々によって、西洋の文明に共感しないよう強いられているので

ある。

一八六六年の二回目の上奏で彼らはこう述べた。

「私達がこれらの提案をしたのは、私達が西洋の事物の物珍しさに影響されたわけでもなく、西洋の技芸に魅了されたわけでもなく、単に科学なしにこの技芸を導入しようとするのは公費の無意味で役に立たない浪費につながるであろうと考えたためであることを説明しないといけない。それは現在喫緊のものではないとか、私達が西洋のそれらを受容するために私達自身のやり方を棄てるのは間違っているとかが、あるいは結局西洋の学生となることは中国にとって非常な恥辱であるなどといって、これらの試みを批判する人達がいる。

「今や西洋の国々は日々生産される新しい物を互いに学んでいるだけではなく、東の海にある日本は最近英国に人を送り、英国の言語と科学を学ばせている。日本のような小さな国が進歩の道に進んでいく方法を知っているのに、どうして中国が古い伝統に執着し、覚醒する方法を思案することをこの上ない恥辱だと考えるのであろうか！

「新しい試みについての様々な計画に加えて、彼らは翰林院の学生達は、傑出した学術的素養を有し、若干の役人としての職務も有しているが、同文館に入学し科学についての勉強を行うべきであると提案した。科学といっても学生達にとっては簡単なことであるときっと気づくであろう」。

新たな事業に様々な規制を加えた上に、彼らは次のような結論を下した。つまり、「古典の知識に優れ、公務がいささか重荷となっている翰林院の学生を同文館に入学させ、科学を学ばせれば、彼らはすぐに科学的知識を習得するだろう」。

一八六六年春、ハート氏は二つの重要な目的をもって、ヨーロッパへ赴いた。目的の一つは教習と契約すること。もう一つは、彼が魅力的で裕福な女性を一人伴って帰ってきたことから察せられた。教習の雇用については、以前から予想されていたように、彼にはあまり運がなかった。ヨーロッパから来た五人のうち、一人は到着後亡くなり、もう一人は北京に到着後、職務に就く前に重病にかかり、もう二人は扱いにくい人物だということが分かり、同様に早

世した。この度重なる不幸の唯一の例外はビレキン (Anatole Billequin) 氏で、彼は二十五年間優れた業績を残した後、パリから来訪した。彼の最大の功績は古めかしい錬金術の本拠地である中国に、近代的な科学を導入したことである。

特に興味深い人物といえば、天文学の教授だったヨハネス・フォン・グンパツハ (Johannes von Gumpach) だ。彼はドイツ人で、男爵を自称し、科学界では有名であるように振舞った。彼の業績については、ロシアの天文台のフリッチェ (Hermann Frische) 教授の一言が最もよく表している。いわく、「彼はおそらく文献学者であって、天文学者ではないね」。彼はイスマイルの<sup>(3)</sup>ような一風変わった人間として知られていたが、元素論争に關しても彼は他の学者と意見が異なっていた。彼の悪評を最も高めたものは、重力についてのニュートンの重力理論をひっくり返す論を公表したことだった。空間にかかる圧力を引力とする代わりに、彼は引力はばらばらに、あるいはまとまった宇宙の一部だと定義した。彼が言うには、地球はオレンジのような球形ではなく、レモンのような紡錘形をしている、すなわち偏円ではなく偏長だという。神学的には、彼は汎神論者だったが、信仰心はあった。いみじくもウィリアム博士がこう表現したように、「彼の気分を損ねるのに、神以上に適したものはいなかった」。しかし、こうした点だけで彼が変人とされたわけではない。

彼の多くの奇矯な考えは例えば火花のような、想像外の、通常とは正反対のものだった。ある夏の日、彼は北京西山の路上で突然の豪雨にあい、多くの本を積んだ車を急流に流されてしまった。水が引くと、本や手稿が里程標のように道の両側に散らばってしまっていた。私が彼に慰めの言葉をかけると、彼は「ああ、何て雨だ！ 私は二十年分の仕事を失い、ニュートンの支配が数百年も伸びた！」と叫んだ。その通り、おそらく数百年は第二のグンパツハは現れないだろう。私がアメリカに帰国中、数学を担当するという彼に割り当てられた業務を拒否して、彼は解雇された。彼の切望していた総教習の地位に私が就いたことに彼は不満を述べ、上海に移った後、彼は契約不履行でハート氏を訴えた。上海の陪審はハート氏に千八百ポンドの罰金を命じたが、裁判官は枢密院諮問機関への上告を棄却し

た。収入のない、不安定な生活が数年続いた後、彼は非常に困窮した中で亡くなった。彼には奇行癖があったが、とてもウィットに富んだ多才な人物だった。彼の最大の弱点は、働かずに生計を立てようと強く願ったことである。

## 第七章 同文館（続）

同文館のある場所には御伽噺のような伝説があった。かつて、そこはモンゴルの家系で軍機大臣を務めた賽尚阿が所有していた。太平天国の乱で賽尚阿が失策をおかし投獄された際、邸宅も没収されていた。彼の息子で才人として知られた崇琦は父の刑期を分け与えられるよう嘆願した。老將軍は不名誉のうちに亡くなったが、孝行の報いとして、栄光の日々が彼の家族に用意されていた。献身的な息子は科擧の三試に全て合格し、皇帝の面前での殿試にも通り、彼の名は皇帝の「朱筆」によつて状元として記された。彼以前に滿州八旗で状元を獲得したものは誰もいなかった。その高い名譽は彼の娘にも及び、阿魯徳は芸術の才能に優れた少女だったが、撰政皇后によつて若い皇帝の皇后に選ばれた。しかしながら、彼女の華麗な皇后としての日々は短く、皇帝の早すぎる死によつて、彼女は絶食による殉死を強いられた。彼女の父は公爵へと昇進し、現在も存命である。彼はこの邸宅で生まれたとされ、不幸な皇后もまたここで生まれたと考えられている。

一八六六年、新しい教習達の赴任を待つて、新しい建物が建てられ、すでにある建物に追加された。それらは平屋で、北京の一般的な様式に則り、床はタイル張り、多少の装飾が施されていた。主要な建物には舗装された前庭があり、その両側には小さな家か別棟があった。学校内には七つの、そうした中庭を囲む建物「四合院」があり、また低層の長屋が二棟、学生達が生活するために用意されたが、同様に学校の職員達も門内で暮らすことが認められていて、学生と合わせて三、四十名が生活していた。それらは兵舎、より正確に言えば、野営所に似ていた。

中国の公共の建物は、皇帝の宮殿を除けば、壮大ではない。帝国学士院の本部である翰林院ですら、その偉大さは

建物ではなく組織にあるというように、簡素な建物だった。我々の印刷所と天文台は、そうした慣習とは一線を画し、注目に値するものだった。活版印刷の技術は本の価格を下げ、知識を広めることで人類の社会状況に革命をもたらしたが、中国では木片あるいは木版に字を彫る、木版印刷が用いられていた。八世紀に発明された木版印刷は十三世紀にマルコ・ポーロらによってヨーロッパに伝えられたと言われ、もしそれがなければ、グーテンベルクの持ち運びのできる活版印刷の発明も、もっと遅くなっていただろうと言われている。中国では、「一枚の木版に彫る方法が主流であったため」字ごとに分ける方法は知られていなかった。粘土や陶器を使う試みはなされていたが失敗に終わっており、活字を鑄造したかどうかは記録に残っていない。鑄造ではなく、さいころ型の銅に字を彫る方法での金属活字の製造は康熙年間に試行されたが、それはグーテンベルクの発明からかなり後のことだった。しかし、手癖の悪い植字工には銅はあまりに魅力的で、康熙帝の孫「乾隆帝」が中国古典の百科辞典のコレクションである『図書集成』を印刷しようとすると、その高価な活字は散逸しており、印刷できなくなってしまっていた。

現在、金属活字は広く用いられているが、活字は全て外国人、主に宣教師によって作られた鑄型から取られている。同文館が開校する前、北京ではアメリカン・ボードに属する伝道出版会が印刷を担っていて、そこで我々の試論も印刷していた。大学士の文祥はその仕組みが整然とし、また迅速であることに感心していたため、私は上海の伝道印刷所の技師のギャンブル氏 (William Gamble) が送ってくれた彼自作の活字を少々、文祥に手渡した。それは後に同文館印刷所を芽吹かせる種だった。ここでは旧来の皇帝のための印刷所が先頃焼失してしまったため、皇帝に献上するための書籍が印刷されたが、同時に同文館の学生のためにも印刷された。私が学校のために小規模でも印刷所があるべきだと述べると、文祥は私に費用の見積もりを尋ね、ハート氏にその三倍の額を請求するよう要請した。全ての機材は空いていた倉庫に無造作に入れられたが、そこは印刷所として稼働するには到底満足しかねる場所だった。私がそのことを指摘すると、彼はすぐには返答せず、一、二日後私が最適だと思う建物を建てるとの知らせとともに多くの職人達をよこした。その土地には盛り土が必要だったが、そのために長年のうちに学内に小さな丘を成し

ていた塵屑を使つてほしいと私は思った。しかし、総理衙門はそれを撤去することは風水、すなわち場所の運氣を損ねると異議を唱えた。そのため、その小さな丘はまだ科学の学校と外交部に公平に風水的によい運氣を招き続けている。保守と進歩の何と奇妙な化合物だろう！

天文台の件は、総理衙門を行動に移させるのは容易ではなかつた。それは欽天監の特権と衝突する可能性が高かつたからだが、この時代遅れの組織は既に天文台があるからといつて天文事業の独占を要求したが、彼らの天文台は月食以外は観測せず、順守していることは（科学的な観測ではなく）貪欲な龍を追い払うために、香を焚き小鼓を叩くことだつた。欽天監は高名なイエズス会士シャルとフェルピーストの指導の下に設立され、彼らの設計に従い、中国の職人によつて製作された、設立当時は一般的だつた銅製の器具一式を保有していた。地球儀、方位角、四分儀、渾天儀は城門に面したテラスに置かれ、二百年もの間風雨に晒され続けていた。だが、それらは昨日作られたように真新しく見えた。冶金学の驚異に触れたいと思つて観光客はそこを訪れるが、それらは実際の観測には全く役に立たないものだつた。それらの中に望遠鏡が見当たらないが、それはおそらくガリレオの偉大な発見は、設立の百年以上前には既に広く知られてはいたが、伝道という目的にはそぐわなかつたからだろう。教会によつてガリレオの学説が異端とされたことが、彼らに望遠鏡の使用を思いとどまらせたのだろう。彼らは才能と英知に溢れた尊敬に値する人々だつたのは確かだが、彼らは宇宙の中心は地球だと考え続け、コペルニクスの学説を否定し、ガリレオをコペルニクスの理論を広めたとして非難した。

新しい天文学を支持する人々による、新天文台設立の嘆願は、少々物議を醸し出した。総理衙門はその必要性を認め、我々に適当な場所が決まり次第、建設すると約束した。いくつかの候補地が挙げられたが、どこも神話の巨人のような地気（風水）と天が争つてしまうというので、風水の問題から解放されて我々が土地を取得できたのは、およそ二十年後のことだつた。一八八八年、新大臣の下、風水の兆候はより寛容に解釈されて、恒久的な建物が三階までの制限つきで許可された。しかしながら、その高さであっても、近隣の土地の価値を下げるには十分だつた。もし

宣教師達がそれを建設したのであれば、きつと暴徒がそれを打ち壊しただろう。だが、皇帝の権威によって認可されていたため、彼らは静かに拳を振り回しただけで立ち去った。

同文館の天文部が生み出したもののうち、好評を得たものの一つが航海年鑑の抄訳だった。欽天監も公式な標準暦であり続けている自分達の暦と比較してみたいと願っていた。欽天監の暦は私達の科学では測りきれない、すなわち道義上(天文学を占星術的に考えない)我々には理解しかねる、星々の良い、あるいは悪い影響を丹念に見極め、日々を幸運か不運に振り分けるということでは確かに価値があった。こうしたことの全ては皇帝の名において布告され、人々はそれに従順に従っていた。この都合の良い託宣なしには、誰も旅行に出発することも、礎石を据えることも、植樹も結婚も、親の葬式ですらも公私にわたる様々な出来事について考えることができなかった。ギリシア正教大修道院前院長のパツラディウスは私にこう言った。彼はこの暦が便利だと思ったことがある。それというのも、この暦は彼が四千マイル離れたロシアの公使を訪ねるのに良くない日を教えてくれたからで、そのお陰で彼は結婚か死かに妨害されない道を選ぶことができたのだ、と。ところで、この暦といえば、ある中国の文人が私達に次のような風刺話を教えてくれた。ある青年が苦悶の声を聴いて、助けに走ると、彼の父が崩れた壁の下敷きになっていた。「待っていて、父さん！ あなたはいつも僕に、暦で決まっていけないものはないと言っていたじゃないか。僕が瓦礫を取り除くのに、今日が良い日なのか見てくるまで、待っていて！」。欽天監はまだ占星術に支配されていて、中国全土もその支配の下にあった。

同文館の教授のうち、九名は外国人だった。以下にリストを示す。

- W・A・P・マーティン (W. A. P. Martin) ʼD.D. LL.D. 総教習、国際法(インディアナ州立大学、アメリカ合衆国)  
 C・H・オリヴァー (C. H. Oliver) ʼM.A. 副総教習、物理学(クイーンズカレッジ、ベルファスト、アイルランド)  
 J・ダジョン (J. Dudgeon) ʼM.D. 解剖学および生理学(エディンバラ大学、スコットランド)  
 S・M・ラッセル (S. M. Russell) ʼM.A. 天文学(クイーンズカレッジ、ベルファスト、アイルランド)



カール・シュトウールマン (Carl Stuhmann) (Ph.D. 科学および鉱物学 (ハンブルク、ドイツ))

Ch・ヴァプロー氏 (Ch.Vapreau) (フランス語および文学 (パリ、フランス))

V・フォングロット氏 (V.von Grof) (ロシア語 (ノヴゴロド、ロシア))

A・H・ヴィルツァー氏 (A.H.Wilzer) (ドイツ語 (ザクセン))

W・マクドナルド (W.Macdonald) (B.Sc. 英語 (ディングウォール、スコットランド))

この他、四名の中国人教習がいて、その内三名は中国語を、一名は数学を担当した。

我々の学生は皆官費生で、生徒数は百二十名に限定されていた。学生達は二つに分けられ、一方は語学から、もう一方は科学から学び始めた。語学から入るグループは北京の旗人出身で、概して外国語を学ぼうとしているが、中国語での学識には乏しかった。もう一つのグループは中国人と満州人から成っていて、科挙に合格するのに十分な知識を有していた。彼らの中には殿試に合格していた者もいたが、多くは举人で同文館で学ぶことで最高の学位を得た。

その中の一人、汪風藻は翰林院の一員になるという名誉にあずかった。そのことから、同文館は士大夫達から多くの尊敬を集め、良家の子弟が入学を希望するようになった。だが、最初はそうではなかった。翰林院から学生を募集することは、中国の学問への侮辱とみなされた。そして、翰林院院長・倭仁は同文館を忌避しようと全力で抵抗した。そしてまた、倭仁との不和はここで終わらなかつた。私が中国に帰国してすぐに起きた厳しい干ばつの際、倭仁はこの災厄の原因は同文館にあるとして、御史の一人に告発するよう扇動した。だが、雲が雨をもたらす前に、すでに嫌悪から生み出された疑いは晴れていた。恭親王は無表情の倭仁の顔の下にあるものを読み取り、「馬鹿げたたわ言を言った」として彼を譴責し、同文館に対抗し、倭仁自身の思想に基づいて運営される学校を設立する権限を与える布告を出すよう、皇帝に提案した。<sup>(4)</sup> 年老いた排外主義者がその挑戦を辞退したのは、彼が自慢していた「中国人科学者」とは比喩表現であると知っていたからであり、また倭仁は総理衙門の大臣の地位も辞退した。それは恭親王が教育の目的で彼に提案したものだったが、(その地位につけば) 彼は自身が洋鬼子「外国の悪魔」以外の名で呼ばな

かった人々と関わり合いにならざるをえないからだった。

五行の不調和から引き起こされた凶兆に助けられ、士大夫の頭目からの攻撃をしのぐことができたのは、同文館にとって小さからぬ勝利だった。こうした五行の議論に、中国人がどれほど影響を受けているかは、皇帝が社会秩序と同様に自然の働きにも責任を負うということからも推測される。大災害、そこから起こることはすべて、皇帝に責任があるとされた。日食や月食は皇帝、あるいは皇后の行いに何か問題があることのしるしとされた。数年後に起きたある事件によって、高い地位にある人々から迷信を取り除くために、どれほど多くの科学の授業が必要だったかが見て取れるだろう。皇帝が先頭に立ち祭祀を行ったが、雨を降らせることに失敗した時、ある賢人が干ばつは風を支配し雲を操る龍に打ち勝つ虎によってもたらされる、と指摘した。賢人はこう言った。「もし、陛下が一頭の虎に聖なる池に飛び込むよう命じ、龍が優位に立てば、雨は降るでしょう」。皇帝の命令で、彼らは実際に生きている虎よりも捕まえるのが容易で、飼育もより安全である骸骨の虎を池に投げ込んだ。それは安く買うことができ、また平和な時にはさほど需要はないが、虎の骨は勇気を与える効能があるとして、薬局で売られていた。運命の皮肉で、宮廷の詐欺師達のこのくだらない案は、進歩の指導者である恭親王と文祥によって推し進められ、実行された。

私は一度、総理衙門を敵視していた者の一人である王文韶を訪ねて来て、彼が早朝皇宮に向かっていた時に驚嘆させられた隕石の出現について説明したことがある。王文韶はその恐ろしい災害に怯えていたが、私の説明で彼は少々安堵したようだった。しかし、三日後詐欺を共謀した罪で告発されると、王文韶は隕石は彼の没落を予言していたと確信した。彼は無罪となったが、他の人の行動に責任をとり、しばし公職を辞さなければならなかった。彼は李鴻章の後任として、現在は直隸総督となっている。

中国大学生の理解の速さ、忍耐強い勤勉さは科学を学ぶ上でとても役立った。彼らがいつも特に好んだように見たのは化学で、それはおそらく化学が中国の錬金術から派生したものであるからであり、彼らは中国の古典と同じくらい、読み解くことができた。ある日、化学の講義の後、その講義を受けている学生の一人が火のついた状態で発見さ

れた。彼は化学に熱中するあまり、リンの棒を一本盗み、ベストのポケットに入れていた。それはスパルタの狐よりも隠すのが難しいことを証明した。語学については、彼らは化学ほど積極的ではなかった。それというのも、彼ら自身の言語と比較してみると、中国語はアルファベットがなく、文法的性や単数複数の概念、また時制がなく、音節の発音の幅が非常に狭いからだと考えられる。それゆえ、我々は学生に一つ以上の外国語を学ぶことを求めなかった。彼らのうち一か国語であっても熟達する者は稀だった。英文、仏文、露文、独文の四館には、はつきりと特徴の異なる学生達が在籍した。全課程（理科と外国語一科目）は八年まで延長された。卒業証書は西洋の大学のようには与えられなかったが、優秀な成績をおさめた学生達は北京の官位を与えられた。三年に一度の大考つまり卒業試験の後、これは授与された。年ごと、四半期ごと、月ごとの試験では、毎年千ドルに上る賞金が与えられた。四名の学生監が学校の資産などを管理し、学生達の管理も補助した。

規律の維持はさほど難しいことではなかった。同文館の学生は家できちんとしてつけられていて、礼儀正しく従順であり、また学生達のもの静かで、興奮しにくい気質のためでもあった。私が総教習だった二十五年間、私は大きな問題に直面することはなかったが、一件だけ、学生全体で私に静かな反抗の意を示したことはあった。ある青年が渡欧経験があり、フランス語が話せるということで、仏文館の学生達のフランス語会話練習の補佐が認められた。だが、学生達の誰も彼と話そうとしていないと知った時の、私の驚きを想像してほしい。実は、彼はフランス公使館の使用人だった。使用人とその家族は三世代に渡り、公職に就けないことになっていた。彼らの中に仲間や同輩として、使用人がいるということは、同文館に来ている若い満州人の誇りを汚す、致命的な傷だった。幸いにして、そのストレスから逃れるために、私は彼を同文館から退職させるための良い口実を見つけた。それは彼の養父が私に訴え出たからで、青年は一カ月あたり十三ドルの手当を受け取っているはずで、その収入で貧しい家族を十分養うことができるのだが、彼はそれを家族に分け与えていないという訴えだった。彼は親孝行な息子ではなかった。どのような才能があっても、孝行心のない者は同文館には留まらない。彼の「自称」父親は不平を訴えたことを、後で悔いた。

注

- (1) leonum arida nutrit. Horatius 『Carmina』 odes l. 22, Perseus Digital Library (<https://www.perseus.tufts.edu/hopper/>). Tufts University. <https://www.perseus.tufts.edu/hopper/text?doc=Perseus%3Atext%3A1999.02.0024%3Abook%3D1%3Apoem%3D22>, (2023-10-22閲覧)
- (2) 出エジプト記七、第2テモテ三8 『聖書』聖書協会共同訳、二〇一八年。
- (3) アブラハムの長子。創世記一六、二五18。
- (4) 蔣廷黻(佐藤公彦訳)『中国近代史』東京外国語大学出版会、二〇二二年「原書一九三八年」、一一一〜一一三頁。